

## 第一巻 資本の生産過程:第一篇 商品と貨幣:第一章 商品

第一節:商品の二つの要因。使用価値と価値(価値の実体と価値の大きさ)。(原p49)

(1)資本主義的生産様式が支配的に行われている社会の富は、1つの「巨大な商品集積」として現われ、個々の商品は、その富の要素形態として現れる。それゆえ、われわれの研究は、商品の分析から始まる。

(Der Reichtum der Gesellschaften, in welchen kapitalistische Produktionsweise herrscht, erschint als eine "ungeheure Warenausammlung", die einzelne Ware als seine Elementarform.)

(2)商品は、まず第一に、外的対象であり、その諸属性によって人間の様々な欲求を満たすものである。その欲求が、例えば胃袋からであろうと、空想からであろうと少しも事柄を変えるものではない。

ここではまた、物がどのようにして人間の欲望を満たすか、直接に生活手段として、即ち、享受の対象としてか、それとも回り道をして、生産手段としてかということも、問題ではない。

(3)おののの有用物、鉄、紙等々は、二重の観点から、即ち、質の面と量の面とから、考察される。このような物は、それぞれ、多くの属性の全体であり、従って、様々な面から見て有用でありうる。これらのいろいろな面と、従ってまた物の様々な使用方法とを発見することは、歴史的な行為である。有用な物の量を計るために社会的な尺度を見出すことも、そうである。様々な商品尺度の相違は、あるものは計られる対象の性質の相違から生じ、あるものは慣習から生ずる。

(4)ある物の有用性は、その物を使用価値(Gebrauchswert)にする。しかし、この物の有用性は空中に浮いているのではない。この有用性は、その商品体の諸属性によって制約されているので、商品体なしには存在しない。それゆえ、鉄、小麦、ダイヤモンドなどのような商品体そのものが、使用価値または財なのである。商品体のこのような性格は、その使用属性を獲得するために人間が費やす労働の多少には関わりがない。使用価値の考察に際しては、常に、1ダースの時計とか1エレのリネンとか1トンの鉄とかのようにその量的規定性が前提されている。いろいろな商品のいろいろな使用価値は、一つの独自な学科である商品学の材料を提供する。

使用価値は、ただ使用や消費によってのみ実現される。使用価値は、富の社会的形態がどんなものであるかにかかわりなく、富の素材的な内容をなしている。われわれが考察しようとする社会形態にあっては、それは同時に、交換価値(Tauschwert)の素材的担い手をなしている。

(5)交換価値は、まず第一に、ある一つの種類の使用価値が他の種類の使用価値と交換される量的関係、即ち、比率(割合)として現れる。それは、時と所とによって絶えず変動する関係である。それゆえ、交換価値は偶然的で全く相対的なものであるように見える。したがって、商品に内的な、内在的な交換価値("固有価値")というのは、1つの"形容矛盾"であるように見える。

事態を、もっと詳しく考察してみよう。

(6)ある一商品、例えば、1ワオーターの小麦は、 $x$ 量の靴墨とか、 $y$ 量の絹とか、 $z$ 量の金などと、要するに様々な割合で他の諸商品と交換される。だから、小麦は、様々な交換価値をもっているのであって、ただ一つの交換価値を持っているのではない。しかし、 $x$ 量の靴墨も $y$ 量の絹も $z$ 量の金なども、どれもみな1ワオーターの小麦の交換価値なのだから、 $x$ 量の靴墨や $y$ 量の絹や $z$ 量の金などは、互いに置き換えられうる、または互いに等しい大きさの、諸交換価値でなければならない。そこで、第一に、同じ商品の妥当な諸交換価値は一つの同じものを表わしている、ということになる。しかし、第二に、およそ交換価値は、ただ、それとは区別されるある実質の表現様式、「現象形態」でしかありえない、ということになる。

(7)さらに、二つの商品、たとえば小麦と鉄をとってみよう。それらの交換関係がどうであれ、この関係は、常に、ある与えられた量の小麦がどれだけかの量の鉄に等値されるという1つの等式、たとえば、1クオーターの小麦=aツエントナーの鉄 によって表わすことができる。

(※ 1Quarter Weizen=a Ztr. Eizen) Ztr.=Zentner ツエントナー=重量単位=50Kg)

この等式は何を意味しているのか？ 同じ大きさの1つの共通物が、2つの異なる物のうちに、即ち、1クオーターの小麦の中にもaツエントナーの鉄のなかにも、存在するということである。

従って、両者は、それ自体としては一方でもなければ他方でもない、ある第三のものに等しい。

従って、両方ともある1つの第三のものに等しいのであるが、この第三のものは、それ自体としては、その一方でもなければ他方でもないのである。だから、それらのうちのどちらも、それが交換価値である限り、この第三のものに還元できるものでなければならないのである。

(8)簡単な幾何学上の一例は、このことをもっと分かりやすくするであろう。多角形の面積を求めたり比較したりする場合、我々は三角形に分解して計算する。ところで、三角形の面積は、その形とは別な、底辺×高さ÷2で表される。これと同様に、諸商品の諸交換価値は、それらがあるいはより多く、あるいはより少なく表している1つの共通なものに還元されるのである。

(9)この共通なものは、商品の幾何学的とか物理学的とか化学的などというような自然的属性ではあり得ない。そもそも商品の物体的諸属性が問題になるのは、ただ、それらが商品を有用なものにし、従って使用価値にする限りでのことである。ところが、他方、諸商品の交換関係を明白に特徴づけているものは、まさに諸商品の使用価値の捨象なのである。この交換関係のなかでは、ある1つの使用価値は、それが適当な割合でそこにありさえすれば、他のどの使用価値とも全く同じものと認められるのである。…使用価値としては、諸商品は、何よりもまず、相異なる質であるが、交換価値としては、諸商品はただ相異なる量でしかありえず、従って、1分子の使用価値も含んではいないのである。(p51)

(10)そこで、商品体の使用価値を度外視すれば、商品体に残るものは、ただ労働生産物という属性だけである。…労働生産物の使用価値を捨象するならば、それを使用価値にしている物体的諸成分や諸形態をも捨象することになる。もはやそれは机や家や糸やその他の有用物ではない。労働生産物の感性的性状はすべて消し去られている。それはまた、もはや、指物労働、建築労働、紡績労働、あるいはその他の一定の生産的労働の生産物でもない。労働生産物の有用性と一緒に、労働生産物に表されている労働の有用性は消え去り、従ってまた、これらの労働のいろいろな具体的形態も消え去り、これらの労働は、もはや、互いに区別されることなく、すべてことごとく、同じ人間的労働に、即ち、抽象的人間的労働に、還元されているのである。

(gleiche menschliche Arbeit, abstrakt menschliche Arbeit…p52)

(11)そこで、これらの労働生産物に残っているものを考察しよう。それらに残っているものは、同じ幻のような対象性以外にはなにもなく、無差別な人間的労働の、即ち、その支出の形態には関わりのない人間的労働力の支出の、単なる凝固物以外にはなにもない。これらの物が表しているのは、ただ、その生産に人間的労働力が支出されており、人間労働が積み上げられているということだけである。このようなそれに共通な、この社会的実体の結晶として、これらの物は、価値－商品価値なのである。

(12) 諸商品の交換関係そのものの中では、商品の交換価値は、その使用価値には全くかかわりのないものとして現れた。そこで、実際に労働生産物の使用価値を捨象してみれば、丁度いま規定されたとおりの労働生産物の価値が得られる。だから、商品の交換関係または交換価値のうちに現れる共通物は、

商品の価値なのである。研究の進行は、我々を、価値の必然的な表現様式または現象形態としての交換価値に連れ戻すことになるだろう。しかし、この価値は、さしあたりますこの形態にはかかわりなしに考察されなければならない。

(13) だから、ある使用価値または財貨が価値をもつのは、ただ抽象的人間労働がそれに対象化または物質化されているからでしかない。では、その価値の大きさはどのようにして計られるのか？ それに含まれている「価値を形成する実体」の量、即ち、労働の量によってである。

労働の量そのものは、労働の継続時間で計られ、労働時間はまた1時間とか1日とかいうような一定の時間部分をその度量標準としている。

(14) すると、ある人は、こんな風に考えるかも知れない。その物に費やされた労働の量で商品の価値が決まるなら、怠惰で、未熟な労働者の作った商品の方がより価値があることになる。

なぜなら、彼の生産物にはより長い時間を必要とするだろうからと。しかし、諸価値の実体をなしている労働は、同じ人間労働であり、同じ人間労働力の支出である。商品世界の諸価値となって現れる社会の総労働力は、無数の個別の労働力から成っているのではあるが、ここでは一つの同じ人間労働力と見なされるのである。これらの個別の労働力のおおののは、それが社会的平均労働力という性格をもち、このような社会的平均労働力として作用し、従って一商品の生産においてもただ平均的に必要な、または社会的に必要な労働時間だけを必要とする限り、他の労働力と同じ人間労働力なのである。社会的に必要な労働時間とは、現存の社会的に正常な生産条件と、労働の熟練及び強度の社会的平均度とをもって、なんらかの使用価値を生産するために必要な労働時間である。

(Gesellschaftlich notwendige Arbeitszeit ist Arbeitszeit, erheischt, um irgendeinen Gebrauchswert mit den vorhandenen gesellschaftlich-normalen Produktionsbedingungen und dem gesellschaftlichen Durchschnittsgrad von Geschick und Intensität der Arbeit darzustellen.)

たとえば、蒸気織機を導入した英國では、一定量の糸を織物に転化するために必要な労働時間をおよそ1/2に減らした。手織りの場合は、従来と同じ時間を要したが、実際に、この影響を受けて、一時間の労働が、半時間の社会的労働で置き換えられ、その結果、彼の個別の労働時間の生産物は、以前の価値の半分に低落したのである。

(15) だから、ある使用価値の価値量を規定するものは、ただ、社会的に必要な労働の量、即ち、その使用価値の生産に社会的に必要な労働時間だけである。個々の商品は、ここでは一般に、それが属する種類の平均見本とみなされる。従って、等しい大きさの労働量が含まれている諸商品、または同じ労働時間で生産されることのできる諸商品は、同じ価値量を持っているのである。一商品の価値と他の各商品の価値との比は、一方の商品の生産に必要な労働時間と他方の商品の生産に必要な労働時間との比に等しい。「価値としては、すべての商品は、ただ、一定の大きさの凝固した労働時間でしかない。」  
(p54)

(16) それゆえ、もある商品の生産に必要な労働時間が不变であるならば、その商品の価値の大きさも不变であろう。しかし、この労働時間は、労働の生産力に変動があれば、その都度変動する。労働の生産力は、様々な事情によって規定されており、なかでも特に労働者の技能の平均度、科学とその技術的応用可能性との発展段階、生産過程の社会的結合、生産手段の規模及び作用能力によって、さらにまた自然事情によって、規定されている。同量の労働でも、例えば豊作のときには8ブッシュルの小麦に表され、凶作の時には4ブッシュルの小麦にしか表されない。同じ労働量が、鉱脈豊かな鉱山では、貧弱な鉱

山より多くの金属を産出する、等々。…

一般的に言えば、労働の生産力が大きければ大きいほど、その物の生産に要する労働時間はそれだけ小さく、その物に結実している労働量はそれだけ小さく、その物の価値はそれだけ小さい。逆に、労働の生産力が小さければ小さいほど、その物の生産に必要な労働時間はそれだけ大きく、その物品の価値はそれだけ大きい。つまり、一商品の価値の大きさは、その商品に実現される労働の量に正比例し、その労働の生産力に反比例して変動するのである。(p55)

(17) なかには、価値ではなくても、使用価値であることがある。それは、人間にとってのその物の効用が労働によって媒介されていない場合である。たとえば、空気や処女地や自然の草原や野生の樹木などがある。ある物は、商品ではなくても、有用であり人間労働の生産物であることがありうる。自分の生産物によって自分自身の欲望を満足させる人は、使用価値はつくるが、商品はつくらない。商品を生産するためには、彼は使用価値を生産するだけではなく、他人のための使用価値、つまりは社会的な使用価値を生産しなければならない。(中世の農夫は、他人のために、他でもなく、領主に年貢を、教主に1/10税を生産したのである。確かに、他人のための使用価値を作っているが、この年貢や1/10税は、商品ではない。商品になるためには、生産物は、それが使用価値として役立つ他人の手に交換によって移されなければならない。)

最後に、どんな物も、使用対象であることなしには、価値ではありえない。もし、物が無用であれば、それに含まれている労働も無用であり、労働の中に入らず、従って、価値を形成しないのである。(p56)